

第4回

私たちの未来のための提言コンテスト

〈どうする？高レベル放射性廃棄物〉

最優秀賞・優秀賞 受賞提言集

主催・・・原子力発電環境整備機構

NUMO

原子力発電環境整備機構

目次

中学生・高校生・高専3年生までの個人・グループ

◇最優秀賞

核のゴミ問題と考える『未来』

晃華学園高等学校 1年

増井美玲さん

(4)

◇優秀賞

教育で変える原子力の未来

浦和実業学園高等学校 2年

野口穂乃佳さん

(6)

発電の『裏側』を身近に

京都教育大学附属京都小中学校 8年

堂田百々花さん

(8)

高専4年生以上、大学生、大学院生の個人・グループ

◇最優秀賞

高レベル放射性廃棄物と向き合う

宮崎大学 1年

若松咲羅さん

(10)

◇優秀賞

高レベル放射性廃棄物 私たちにできること

宮崎大学 1年

乙木知里さん

(12)

後始末は皆で

宮崎大学 1年

塚原遼平さん

(14)

高レベル放射性廃棄物の課題を多くの人が
自分事として考えるようにするには

南九州短期大学 1年

森山明星さん

(16)

最優秀賞・優秀賞 受賞提言紹介

※敬称略

最優秀賞

核のゴミ問題と考える『未来』

晃華学園高等学校 1年

増井 美玲
ますい みれい

2020年10月、北海道の寿都町が高レベル放射廃棄物（以下、「核のゴミ」と表現する）の最終処分場の選定に向けた調査に応募したことで一時期話題となった。町長の判断に反対する住民も多く、町長の自宅に火炎瓶が投げ込まれるなどの混乱が起きた。選定までには三段階の調査があり、その第一段階である文献調査は約2年かかると言われていたが、2年経った現在の時点では、前例がない中の調査のため実際は予定よりも時間がかかる見通しであるという。

この一連のニュースを初めて知ったとき、私は核のゴミの処分に関する問題が一般人にも関係者にも、程度は違えど誰にとってもまだまだ分からない部分ばかりであるのだと感じた。また、この問題はただ核のゴミについての知識を与えられただけでは、自分ごととして考えようとは思いにくいと感ずる。なぜなら、「自分たちはどうせ何を言っても何も変わらないのだから、政府などの利権者だけで責任を取れ」という考えが生まれてしまうからだ。確かに、核のゴミ問題という重大な社会問題は一般市民が考え込んだとしても解決法を思いつくものではなく、自分ごととして考えなければという意識も持ちにくい。そこで私は、自ら「未来」を考えられるような教育を子どもたちに限らず多くの人に施すべきであると考える。

現在実際に行われている教育方法として、生徒たち

自身に良いと思われる処分方法を考えてもらおうというものがある。日本や世界では現在地層処分が採用されているが、それが正解として最初から生徒に伝えてしまわない。これがこの教育法において一つのポイントになっていると思う。私はここからもう一歩踏み込んだ、核のゴミを今後どうするかだけで止まってしまわないような問いかけがあっても良いと思う。例えば、そもそも核のゴミが原子力発電を行うことによつて発生することを考え、原子力発電をこのまま続けてゆくべきか、もし続けてゆくべきでないなら代わりによいような発電方法を進めてゆくべきなのか、などを生徒に考えてもらおう。そしてこのときに大切なのは、化石燃料へ依存することのリスクや、再生可能エネルギーに関する現在の取り組み、原子力発電のメリット（温室効果ガスを排出しない、輸入に頼らず国内の中で資源を賄えるなど）など、さまざまな情報を生徒に与えるようにしてなるべく自由に、発展的に考えられるようにすることである。

また、これはすでに推奨されていることではあるが、核のゴミ問題をより積極的に教科横断型の授業で扱うべきであると思う。核のゴミ問題を一つの教科、例えば物理のみで扱おうとすると、例えば放射能が人体や動植物に与える影響などは取り上げられにくくなり、どうしても一つの見方でしか問題を考えられなくなる。加えて、核やいろいろな発電方法についての知識は、単なるその教科のただの一分野として生徒たちに捉えられてしまう可能性もある。教科横断型の授業形態で核のゴミ問題を取り扱うことで、さまざまな視点から生徒たちに考えてもらえ

ると思う。

日本で生活している多くの人は電気を享受しながら日々暮らしている。だから全員に核のゴミについての重い「責任」があるともいえる。しかし、日本の原子力発電などが何も滞りなく現在まで至っていたら、無関係の一般人がその発電方法の仕組みやその方法の抱えるリスクなどについて考えることもないだろう。つまり、「責任」は言い換えれば、核のゴミ問題が今現在起こってしまったという状況から、日本をより良く変えるアイデアを色々考える「チャンス」であるともいえる。人々の視線が今や過去ばかりに向くのではなく、「未来」に向いているような社会であれば、今ある核のゴミ問題の解決策も見つかっていくのではないかと思う。

参考文献

川原茂雄 「これからのお話 核のゴミとエネルギーの未来」 明石書店 2014年

NUMO原子力発電環境整備機構 教育支援・出前授業 2022年12月21日アクセス

<https://www.numo.or.jp/eess/materials/teacher/>

優秀賞

教育で変える原子力の未来

浦和実業学園高等学校 2年 野口穂乃佳^{のぐち ほのか}

今日の日本において、私たちは原子力発電で膨大な電力を生み出し、それらの電力から豊かな生活を享受している。一方で原子力発電を行うことによって生じた高レベル放射性廃棄物が抱える問題への関心は依然として低いままである。日本原子力文化財団が2021年度に行った、原子力に関する世論調査の結果によると、「高レベル放射性廃棄物の処分について、あなたは、以下のような意見をどのように感じますか。あなたのご意見と近いものをお選びください」という問いに対し「わからない」が23%と全体の4分の1近くを占め、「高レベル放射性廃棄物は、私たちの世代で処分しなければならぬ」という意見は賛成が46%となっている。前年度と比べると関心度は上がったようであるが、自分事としてとらえている人は半数に達しないことからまだ低い水準といえる。

現在、高レベル放射性廃棄物になる前の使用済燃料の貯蔵可能容量は2万4千トンであるが、その貯蔵量は2021年1月末時点で1万9千トンと、貯蔵容量の75%以上を占めているのである。地層処分ができぬままでは、地上での保管は近い未来限界が来てしまうだろう。また、放射性物質の半減期は人間の寿命と比べはるかに長い。そのような長い期間耐えられた建物はいまだかつてないことで、大きな自然災害や戦争などの人為的要因によつて建物が破

壊されるリスクを考慮するとやはり早急に地層処分をするべきなのである。

しかし、日本では最終処分場の場所の選定には至っていない。放射性物質の悪いイメージや地層処分そのものの理解度が低いこともその要因なのではないか。

より多くの人が地層処分について理解を深め、自分事として考えるには、義務教育中に学ぶ機会を増やすことが大切だと私は考える。義務教育は日本に住む人全員が受ける権利を持ち、周知度や理解度を高めることができる。子供が学校で学ぶことで日常会話を通し家族ぐるみで地層処分について考えるきっかけとなると思うからである。しかし、多くの人は授業だけでは時間が経つと内容を忘れてしまうと考えられる。実際、アメリカ国立訓練研究所によつて発表された学習ピラミッドでは、授業を聞くだけでの定着率は5%程度と言われている。

そこで私は、「誰も記憶に残る教育」として小学校や中学校の総合的な学習の時間にオンラインゲーム形式の高レベル放射性廃棄物に関するゲームを取り入れることを提案する。具体的には、処分場の場所の選定から始め、二択形式で住民を説得することを第一のクリアとし、その後ゲーム内で核分裂や半減期についてのミニゲームで得たコインをもとに処分場の建設を行いながら街を発展させるといった内容である。住民を説得するところから始めることで、知識を得るとともに実際に自分たちの街に最終処分場が来るとなったらどう思うか考える機会にもなるだろう。また、処分場建設後の利益や損失、住民の増加率をクラスメイ

ト同士で可視化することで数値を伸ばすためにどうしたら良いかといった、生徒同士の高レベル放射性廃棄物に関するコミュニケーションも期待できる。

令和3年の8月に行われた、GIGAスクール構想に関する各種調査の結果(文部科学省)によると、公立小学校の84.2%、公立中学校の91.0%でICT機器が全学年で使用が開始されている。それらの端末で、授業にゲームを取り入れることで、多くの小・中学生は授業で放射性廃棄物について話を聞くよりも学習しやすく、理解も深められると考えた。ゲームによって対話が生まれた場合、定着率は50〜75%まで上昇する。

2011年に起きた東日本大震災による福島第一原発事故によって人々の放射能に対する関心は高まったと思うが、高レベル放射性廃棄物に関してはまだ認知度が低く、大きな課題が残っていると思う。高レベル放射性廃棄物が抱える問題を未来の世代に「託す」のではなく、自分たちが築き上げた意見や処分に関する問題の解決の糸口を「引き継ぐ」という意識を持って各々が行動すれば、日本の高レベル放射性廃棄物に関する議論は一步前進するのではないか。

【参考文献】

- ・一般財団法人 日本原子力文化財団, “原子力に関する世論調査(2021年度) 調査結果”

https://www.jaero.or.jp/data/01jigyoku/pdf/tyousakenkyu2021/results_2021.pdf (最終閲覧日 2023/1/6)

- ・経済産業省 資源エネルギー庁, “「使用済燃料」のいま～核燃料サイクルの推進に向けて～”

<https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyo/shiyozuminenryo.html> (最終閲覧日 2023/1/6)

- ・原子力発電環境整備機構, “わが国における高レベル放射性廃棄物の地層処分の現状・課題について”

https://www.numo.or.jp/topics/numo_20221019.pdf (最終閲覧日 2023/1/6)

- ・文部科学省, “GIGAスクール構想に関する各種調査の結果”

https://www.mext.go.jp/content/20210827-mxt_jogai01-000017383_10.pdf (最終閲覧日 2023/1/6)

優秀賞

発電の『裏側』を身近に

京都教育大学附属京都小中学校 8年

堂田 百々花^{どうた ももか}

私にとって、「発電所」は馴染みが浅いものだった。授業で学習するまで、自分が普段使用している電気がどこから来ているのか、深く考えたことはなかった。しかし、このような「見えない・分からない状態」は、高レベル放射性廃棄物という課題に対する価値観に大きく関わっていると私は考える。

電気と同じくらい生活に不可欠な「食べ物」と比較しながら説明していく。欲しい食べ物があったとしよう。それを注文すれば、大抵は自分の元に必ず届く。しかし、突然来るわけではなく、私たちには見えていないだけで、「料理を作る」「食材となる生物の育成」「運搬」といった様々な行程が存在し、その行程を踏む際に必要なモノや排出される廃棄物がある。私達がそのことについてよく知っているのは、これらの行程を行う人々や場所が身近だからではないだろうか。

同様に、電気についても考えてみよう。電気も「環境を整えればいつでも使用できる」という特徴は食べ物と同じである。しかし、食べ物とは違う点がある。それは、生産する場所や人々が身近にいないため、行程がイメージしづらいというものだ。そのため、生産等の行程が身近だと嫌でも目に入る「生産・供給による廃棄物」が、電気の場合

合だと目に入らなくなってしまふ。電気の力を用いた様々なものを見るたび、その魅力や利便性に心を奪われがちになり、その裏側を意識せずそれらを求めてしまふようになる。

食べ物も電気も、どちらも生活に必要なモノなのに、課題の認知度が異なるのは、生産や供給に関するこのようなことが背景にあるからだ。私は考える。この課題の解決方法として私は、放射性廃棄物を「生活に必要な物資の生産・供給による廃棄物」だと捉えるための取り組みの実施を提言したい。

この取り組みの根本となる考え方は、「見える化」だ。電気の生産・供給をもっと身近に感じてもらふことで、発電に関する様々なことを馴染み深いものにする。そうやって、エネルギーに対するイメージをより軽くしていくことが目的だ。

具体的な内容は大きく三つに分けられる。「知識」「対話」「体験」だ。初めに、放射線やエネルギー課題に対する知識を学ぶ。これは基礎的なもので良い。次に、エネルギーの専門家と対話する。エネルギー以外のこともからめながら対話することで、何故エネルギー問題が重要視されているのか分かりやすくなる。対話で双方が得るものは多い。最後に体験だ。物事について深く考えることの楽しさが分かるように、議論形式やチームで取り組むものが良いと考える。

大切なのは、この取り組みを学生が主体となり行うことだ。未来を担う者が、さらにその先未来を担う者に向けて開催することで、放射性廃棄物という大きなテーマについて、一体となり考えたいことができるのではないか。

私たちは情報の中で生きているが、実際の経験に勝るものはない。リアルな体験をつくり出し、発電に馴染みのない環境で育ったとしてもエネルギーに関心を持てるようにしていくことが、今後の課題になつていくと私は考える。

最優秀賞

高レベル放射性廃棄物と向き合う

宮崎大学 1年 若松 咲羅^{わかまつ さくら}

「高レベル放射性廃棄物」と聞いて、どんなイメージを持つだろうか。「目に見えないものだから怖い」、「とても危険なもの」、「難しそうによく分からない」といったイメージを持つ人が多いかもしれない。実際私も、詳しく知るまでは、そのようなマイナスなイメージを持っていた。しかし、詳しく知っていくうちに、高レベル放射性廃棄物の処分は、私たちがこれからしっかりと向き合っていくかといけない課題である、と強く感じるようになった。

そもそも高レベル放射性廃棄物とは何なのか、どうして私たちが高レベル放射性廃棄物について考える必要があるのか。まず、高レベル放射性廃棄物とは、原子力発電で使用した燃料をリサイクルした後に残るものである。現在日本では、原子力発電で発生した高レベル放射性廃棄物の放射能が人体へ影響を及ぼさない程度になるまで地下深くに埋めて管理する「地層処分」を行う計画である。放射能が十分に低くなるまでには、長い期間が必要になるため、将来世代の中核を担う私たちが問題の重要性を認知・理解する必要がある。また、高レベル放射性廃棄物の地層処分は、長期的な事業であるからこそ、日本国民全員で考える必要がある問題である。

では、高レベル放射性廃棄物の処分の中でどのような課題があるのだろうか。地層処分を行う場所を決めるためには様々な条件がある。長い期間地下に埋めるため、数万年以上を見据えたりリスクを考慮する必要がある。地震や津波、火山、鉱物資源、輸送など様々な条件をクリアした場所が埋め立ての地として選ばれる。どこでもその条件をクリアできるわけではない。また、仮に条件をクリアしたとしても地域住民の方の賛成を得なければならぬ。地域住民の方の高レベル放射性廃棄物に対する理解は難しいため、受け入れる地域が見つからないというところが、今の日本の高レベル放射性廃棄物の処分における課題である。

この、高レベル放射性廃棄物の処分における課題を、多くの方が自分ごととして考えるようになるには、どのような取り組みを行うとよいだろうか。まず、日本国民に高レベル放射性廃棄物や地層処分について正しい知識を身に付けてもらう必要がある。

そのためには、「難しいもの」「よく分からないもの」といったイメージを取り除く必要があると考える。具体的な策としては、高レベル放射性廃棄物や地層処分について、コマースやポスターなどを用いて分かりやすく、端的に取り組みを知ってもらうとよいと考える。そうすることで、高レベル放射性廃棄物や地層処分をより身近に感じてもらうことができるとも思われる。また、説明や取り組みだけではなく、地層処分の受け入れによる支援や恩恵が、街の活性化に繋がるといった、プラスのことを多くの人に知ってもらうと、受け入れに対するマイナスな気持ちが少しは変わるかもしれない。少し現

実的ではないかもしれないが、テーマパークのようなものを作り、子どもから大人まで楽しく学び、より身近に感じることができるような場所があるとういかもしれない。そうすることで、もともと持っていたイメージを払拭し、多くの人が自分ごととして考えてもらえると考ええる。

また、私自身ができる取り組みとしては、省エネに取り組みたい。省エネによって、生活に必要なエネルギーが少なくなれば、原子力発電に頼る分を減らすことに繋がるかもしれない。そうすることで、高レベル放射性物質の発生を減少させることができる。他には、私は将来小学校の教員を目指しているので、もし小学生に原子力発電や地層処分などについて教える機会があったら、正しい知識を教えられるようになりたい。そのためにも、まずは私自身が正しい知識を身に付けて、必要以上にマイナスイメージを持たないようにしたい。自分の地域ではなくても他の人たちからして、自分にも深く関係しているものだから、という考え方を常に持つておきたい。

優秀賞

高レベル放射性廃棄物 私たちにできること

宮崎大学 1年 乙木 知里 おとしぎ ちさと

私たちは六ヶ所村を見学し、高レベル放射性廃棄物の処分方法を学ぶことで、いつかは宮崎やその他の地域でも処分することを検討しなければならぬのだということを知りました。しかし、他学部や高校生以下の学生に高レベル廃棄物やその処分方法について知っているか聞いてみると、ほとんどの人から名前すらも知らないという回答が返ってきました。そこで私は夏休みに青森で学んだ内容を、できるだけ若い世代の学生などに知ってほしいと思いました。そこで宮崎でも実践できるいくつかの方法を考えました。

一つ目は、お祭りなどの子供がたくさん集まるような場所や、大学生や高校生などが共同で六ヶ所村で学んできたことや、受け入れることの利点などを伝えるようなコーナーの屋台などを開くことです。高レベル放射性廃棄物を広める方法は公民館や、学習施設で開催されるというイメージが多いです。しかし、若い世代に伝える中で、名前もあまり聞いたことのないような内容を、自らがどこかに赴いて学ぶというの少しハードルが高いように感じます。お祭りなどで目に飛び込んでくるような工夫をしたり、高校生や大学生などの年齢の近い世代が開催するほうが、子供も親近感を持ってくれやすいのではないかと思います。

二つ目は、夏休み期間中に小中学生の親子向けに自

由研究の題材として、講義や映像資料などで学習できるように場を設けるとのことです。

子供とその両親に高レベル放射性廃棄物について学んでもらうことで、研究の材料になるだけでなく、家族全体でこの問題について共有できるきっかけになると思います。また、自由研究を学校で発表する場や、掲示されるような機会があれば、高レベル放射性廃棄物の存在をより多くの人が知ることになるのではないかと考えます。

三つ目は、町の人たちに処分場がこの土地に来ることによる利点や、受け入れることでどのように町が活性化するかというようなイメージを伝えるような、ポスターやチラシを作成することです。高レベル放射性廃棄物と聞くと、関連づく内容として福島第一原発事故のような体に有害で人が住めなくなるほどの脅威であることなどがあげられると思います。しかし、安全な処分方法を考えることで、人体にほとんど影響しないということをより明確に知ってもらい必要があると考えます。私たちは一時間以上の講義や、一日の見学などを通して学んできましたが、ポスターなどの簡単な絵にすることにより、少しでも多くの人の関心を得ることができのではないかと考えます。また、活性化した時の町のイメージ図などを用意すれば、ただの危険なものという考え方から、私たちの生活を豊かにしてくれるものだという風に考えられるようになるのではないかと考えます。

以上の三つのことは、NUMOさんだけでなく、夏休みなどに実際に足を運んで学んできた大学生や高校生なども参加することにより、人から人へとより多くの人に身近に感じられるようになるのではないかと考

えました。私たちが宮崎や、その他の地域にも情報を提供し、みんなで処分法について考えていくために今後も学び続けていく必要があると感じました。

優秀賞

後始末は皆で

宮崎大学 1年

塚原 遼平つかはら りょうへい

「電気は本当に必要なのか。」今一度考えてみてほしい。もちろん、答えは「必要」である。誰もがスマートフォンを持ち歩くこの時代、私たちの生活は電気なしでは成り立たないと言えよう。そう、現代において電気は必要不可欠な存在なのである。よって、発電をして多くの電気を賄っていかねばならないし、その過程で排出される廃棄物も処理しなければならぬ。しかし原子力発電に限っては、処理がとて難しい状況にある。もちろん難しいというのは、使い終わった燃料から出る強い放射線を防ぐことではなく、処理が危険だと感じる人が一定数いるので、簡単に処理ができないということだ。必要不可欠な高レベル放射性廃棄物の処理をスムーズに行えるようにするために、多くの人にその全容と安全性を理解してもらわなければならない。

具体的な策として、この問題を学校の授業で扱ってもらおうことである。公共の時間の中で、話題の提供をするだけでもいいし、特別活動として原子力発電環境整備機構の方に講話をもらってもいい。授業で行うという強制力と、次世代を担う子どもたちに伝えるという二点のメリットから、この策を提案する。

次に、この問題をメディアに取り上げてもらうことである。活動していく中で、やはり現代の国民の方々から理解を得ることも大事だ。なので、メディア

アを通してリアルタイムで発信し、一人でも多くの人に情報を届けるべきだ。また、一口にメディアといっても数多くの種類があるが、私は特に動画配信サービスでの活動を推奨したい。なぜなら、近年のテレビ離れやソーシャルネットワークの普及率を鑑みれば、動画配信サービスの影響力は計り知れないからである。さらに、有名な動画配信者を起用すれば、ニュースで流れているだけでは目に留めない人も巻き込むことができるという良さもある。拡散力や話題性を重視して、この策を提案する。

私は、原子力発電環境整備機構の方から実際に話を聞くまで、地層処分には抵抗があった。恐ろしいのが、これといった理由がないまま反対していたことだ。よく知りもしないで「放射線が出るかもしれない」「やっぱり危険そうだ」と決めつけていた。こういった人は私だけでなく、意外と多くいると思う。自分たちの未来に関わる大事な問題を、勘違いしたまま判断を下さないように、情報を発信する策を講じなければならない。

高レベル放射性廃棄物は、「放出される放射線が二メートルのコンクリートにより、安全に一時貯蔵されている」さらに「爆発性がない」この二点から、安全性を確保することが可能であると考えられる。

また、発電における原子力発電の立ち位置も重要である。現在日本の電気はほとんど海外からの輸入に頼っているのが、そこに頼りすぎてしまうと他国でトラブルがあった際に電力不足に陥ってしまう。よって、他の発電が非常に重要な役割を果たしているのである。さらに、原子力発電は他の

水力発電や風力発電と違って、天候に左右される
ことがなく、エネルギーの再利用もできるとい
うメリットもある。

電気が必要不可欠なこの時代、持続的な発電を
行っていくためにも、高レベル放射性廃棄物の地
層処分の必要性を一人でも多くの人に理解して
もらわなければならぬ。スマートフォン、テレビ
など様々な媒体や人によって、知る人が増えるこ
とを切に願う。私自身も家族や友人に話したり、
教師になった際に、学校で授業をする流れをつ
くるなど、自分にできることを前向きに取り組み
たい。

優秀賞

高レベル放射性廃棄物の課題を多くの人が

自分事として考えるようにする為には

南九州短期大学 1年 森山 明星 もりやま あかり

私はこの問題を自分ごととして捉えるようにするために二つの事が必要と考えた。

まず一つは、この高レベル放射性廃棄物について楽しく学べる機会を設けることだ。日本原子力文化財団の調査によると、日本の高レベル放射性廃棄物に対しての認知度は38・3%である。このように放射線や放射性廃棄物についての関心がないということが分かる。そのため、多くの人が自分ごととして考えるようにするには、まず、興味を持つってもらうことが必要である。

例えば、学校や科学博物館などで、放射線に関するクイズラリーを行う。または、霧箱という実験を行い、放射線の通る道を実際に見てもらおうなどがある。これを行うことで放射線について学ぶ機会もさらに増え、より興味を持つてもらえるようになる。

次に、高レベル放射性廃棄物の課題を知ってもらう前に、放射線は私達の身近なところで役に立っているということを知ってもらうべきである。放射性廃棄物への関心が低いということから、放射線や放射性廃棄物という言葉に聞きなれておらず、身近なものに感じにくいと分かる。そのため、初めから高レベル放射性廃棄物の課題について考えてもらうのは難しい。だから、まずは、放射線は私達の身近に

存在していると理解してもらおうとより分かりやすくなる。

例えば、植物の品種改良で放射線が用いられている。植物に放射線をあてて育てることで、寒さや病気に強い作物を作ることができる。さらに、レントゲンのエックス線も放射線のことをいい、放射線が体を通りぬけたときにできる「かげ」を写真に写すことで体の中を見ることができる。このように、放射線を自分の身近に感じることができる。できれば、高レベル放射性廃棄物についてもより分かりやすくなるだろう。

最後に、高レベル放射性廃棄物の課題について多くの人に自分事として考えてもらうためには、やはり興味・関心をもってもらうことが重要である。そして、より多くの人という部分に視点をおいて考えるとすれば子供や大人までの幅広い世代の人に理解してもらう必要がある。それをふまえて、最初のほうで言ったように、楽しく学べる環境を提供することが一番の近道である。楽しく学ぶことで、多くの人の思い出に残り、より興味をもってもらえるだろう。さらに、放射線が身近に存在していると感じてもらうことも興味・関心をもってもらおう一つの手段といえる。このように、より多くの人に高レベル放射性廃棄物について理解してもらえるように、放射線について楽しく学んだり、放射線を身近に経験した中から知識を蓄えていくことで、高レベル放射性廃棄物について自分事として考える人も増えていくのではないだろうか。

入賞者等一覧 (敬称略)

中学生・高校生・高専3年生までの個人・グループ

最優秀賞

晃華学園高等学校

増井 美玲

優秀賞

浦和実業学園高等学校
京都教育大学附属京都小中学校

野口 穂乃佳
堂田 百々花

入 選

福島県立ふたば未来学園高等学校
浦和実業学園高等学校
浦和実業学園高等学校
浦和実業学園高等学校
晃華学園高等学校
晃華学園高等学校
福井県立美方高等学校
京都教育大学附属京都小中学校
京都教育大学附属京都小中学校
京都教育大学附属高等学校
京都府立菟道高等学校
京都府立菟道高等学校
早稲田佐賀中学校
早稲田佐賀中学校

石上 琴乃
千代田 愛海
立澤 優那
和知 瑠璃
加藤 奈々
正田 ころろ
崎元 葵
大元 靖久
堤 咲稀
石崎 悠也
武市 太陽
田中 啓悟
徐 天幻、丸山 新奈
白戸 翔

高専4年生以上、大学生、大学院生の個人・グループ

最優秀賞

宮崎大学

若松 咲羅

優秀賞

宮崎大学
宮崎大学
南九州短期大学

乙木 知里
塚原 遼平
森山 明星

入 選

東京都市大学
静岡大学
宮崎大学
南九州短期大学
南九州短期大学

橋本 ゆうき
星野 柚香
阿部 亮太郎
宮園 花菜
山内 千慧

学校賞

浦和実業学園高等学校
晃華学園高等学校
京都教育大学附属京都小中学校
京都府立菟道高等学校
南九州短期大学



第4回「私たちの未来のための提言コンテスト」募集要項

- ◇募集期間： 2022年7月11日（月）～2023年1月16日（月）
- ◇応募資格：「中学生・高校生・高専3年生までの個人・グループ」
「高専4年生以上・大学生・大学院生までの個人・グループ」

- ◇締切り： 2023年1月16日（月）消印有効
- ◇応募条件・未発表作品であること
（過去1年以内に発表や投稿したものは除く）
 - ・文献を引用する場合は該当部分にかぎカッコをつけ、最終ページに出典を記載

◇応募方法

- （文章）
 - ・文字数1,200～2,000文字程度
 - ・400字詰め原稿用紙またはWord A4 サイズ（1行20字詰め30行以内）
 - ・手書き・パソコン作成のいずれも可（具体的な制作物<ポスター等>の添付可）
 - ・作品にエントリーシートを添付
 - ・送付方法 郵送、持込み、メール送信のいずれも可
- （動画）
 - ・3分程度（データ形式は不問）
DVD、BD、SDカードなどにデータを保存し、送付
※DropBoxやGigaファイル便等を利用し、メールでの送付も可
 - ・表現方法（実写、アニメ、CG、スライド等）、撮影機材は不問。
 - ・動画ソフト、アプリ等による動画の加工・編集は自由。
 - ・使用する音楽や写真などは、著作権フリーのものか、事前に権利者の許可をること。

<募集の結果>

「中学生、高校生、高専3年生までの個人・グループ」

文章形式：308作品、動画形式：3作品

「高専4年生以上、大学生、大学院生の個人・グループ」

文章形式：32作品、動画形式：15作品

☆入賞者・学校賞受賞校：17ページ参照



応募校一覧

東京学芸大学附属国際中等教育学校

富山大学教育学部附属中学校

京都教育大学附属京都小中学校

京都市立大淀中学校

早稲田佐賀中学校

沖縄県立球陽中学校

聖光学院高等学校

福島県立ふたば未来学園高等学校

浦和実業学園高等学校

晃華学園高等学校

福井県立敦賀高等学校

福井県立美方高等学校

京都教育大学附属高等学校

京都府立菟道高等学校

愛媛県立松山工業高等学校

熊本県立第一高等学校

舞鶴工業高等専門学校

南九州短期大学

東京都市大学

静岡大学

宮崎大学

琉球大学

発行：原子力発電環境整備機構

制作：株式会社プラスエム

(2023年3月5日発行)

＜「私たちの未来のための提言コンテスト」運営事務局＞プラスエム
〒104-0032 東京都中央区八丁堀3-17-6群成舎八丁堀ビル6階
電話：03-5541-7080 FAX：03-6222-4823
メール：Teigen@plus-m.co.jp